

日本個性化教育学会

発行

2019年9月7日

日本個性化教育学会報

発行責任者

第34号

加藤幸次

今年度の第12回全国大会は、神戸国際大学を会場として、8月10・11日に開催されました。会員の皆様に、その報告を行います。

<第12回日本個性化教育学会・神戸大会>

○テーマ「個をみきわめたオーダーメイドの授業づくり」 ー新学習指導要領の全面実施に向けてー

○期日 2019年8月10日(土)・11日(日)

○会場 神戸国際大学

○日程 1日目 8月10日(土)

9:30～9:50 開会行事

10:00～11:10 基調講演「新学習指導要領が成し遂げたもの、積み残したもの」

奈須正裕(上智大学)

11:20～12:30 講演「高大接続改革・大学入学者選抜改革と学習評価」

佐藤真(関西学院大学)

12:30～13:30 全国理事会

13:30～16:30 分科会・自由研究発表

<分科会A 1>

「授業づくり、単元づくり」

コーディネーター 橋本隆公(大阪成蹊大学)

実践発表 総合を中心に

林 愛子(神戸市立長尾小学校)

「Heart in Heart 共に生きる」

奥井誠樹(神戸市立東灘小学校)

「生き生きと探求し一人一人が学びを実感することをめざした授業づくり」

藤本博嗣(神戸市立駒ヶ林中学校)

「防災シミュレーションゲームを用いた防災学習」

<分科会B 1>

「カリキュラム・マネジメント、学校づくり」

コーディネーター 藤本勇二(武庫川女子大学)

実践発表 学級経営とカリキュラム・マネジメント

足立浩基(丹波市立中央小学校)

「学びを深め合う学校づくりをめざして」

舘岡真一(妙高市立妙高小学校)

「1年間の学びの中核となる宿泊学習を創る」

森 勇介(聖心女子学院初等科)

「一人一人を大切に、安心して学びあえる学習集団づくり」

<自由研究発表I>

コーディネーター 浅沼茂(立正大学)・香田健治(関西福祉科学大学)

研究発表

1. 山野真琴(岐阜聖徳学園大学附属小学校)

「単元自由進度学習から見た子どものそだち 社会科の実践を通して」

2. 竹内淑子(元・半田市立宮池小学校)

「自由進度学習と教師の力量」

3. 熊 梅(貴州师范大学教育学院) 邓 宏(贵阳乐湾国际实验小学) 梁晓松(贵阳乐湾国际实验小学)



「単元課程開発：教師として必要な主な能力」

4 任胜洪（貴州师范大学）

「小学校教育を専攻する学生たちのための個性化養成の実践的試み」

5 大村龍太郎（東京学芸大学）

「『個』の思いが生きるコミュニケーションを実現する小学校外国語授業づくりの要件」

16:40～17:10 会務総会

2日目 8月11日（日）

9:30～12:30 分科会・自由研究発表

<分科会A 2>

「授業づくり、単元づくり」

コーディネーター 橋本隆公（大阪成蹊大学）

実践発表 教科を中心に

新木 涼（大阪市立古市小学校）

「個々のつまづきに応える自己評価シートを用いた算数科問題解決学習」

稲井雅大（大阪市立大江小学校）

「プログラミング教育を通して論理的思考力を育む授業づくり」

四辻伸吾（大阪教育大学附属平野小学校）

「未来を『そうぞう』する子どもたち」



<分科会B 2>

「カリキュラム・マネジメント、学校づくり」

コーディネーター 藤本勇二（武庫川女子大学）

実践発表 授業をつくるカリキュラム・マネジメント

藤池陽太郎（加古川市立川西小学校）

「『よりよい社会を創る力』の育成を目指す総合的な学習の時間」

箱根正斉（西宮市立北六甲台小学校）

「総合を中心とした3年間のカリキュラム・マネジメント」

堀本三和子（奈良女子大学教育システム研究開発センター）

「資質・能力を育てる『奈良の学習法』」

<自由研究発表Ⅱ>

コーディネーター 浅沼 茂（立正大学） 香田健治（関西福祉科学大学）

研究発表

1. 浦郷 淳（佐賀大学教育学部附属小学校）

「算数授業の中で個の学びはどのようにいきるのか」

～小学校3年生「わり算」の学習のまとめの学習に着目して～

2. 増田修治（白梅学園大学）

「幼保小接続に必要な『非認知能力』を育てる」

3. 松井香奈（大阪市立新高小学校） 藤本勇二（武庫川女子大学）

「朝の会における黒板スピーチを通した個の見取りと変容」

4. 簡馨瑩・陳淑芳（臺灣・國立臺東大學幼兒教育学科）

「読み聞かせの理解の室を高める働きかけ … 子供の話す物語に対するプログラムの効果検討」

5. 矢出大介（和歌山大学教育学部附属小学校）

「1人ひとりの学びを表現する総合的な学習の時間～学びと映像作品～」



13:30～16:30 シンポジウム

「個をみきわめたオーダーメイドの授業づくり」

司会 奈須正裕（上智大学）

シンポジスト 佐野亮子（東京学芸大学）

橋本隆公（大阪成蹊大学）

指定討論 加藤幸次（学会会長）

澤田 稔（上智大学）

藤本勇二（武庫川女子大学）

成田幸夫（岐阜聖徳学園大学）

16:40～17:00 閉会行事

基調講演 「新学習指導要領が成し遂げたもの、積み残したもの」

奈須 正裕（上智大学）

新学習指導要領は、以下のような原理的な改革・刷新を成し遂げることに成功した。

- ①子どもの「学び」と「知識」に関する科学的な知見を足場に教育課程政策を立案するという方針と具体的な手続きを実現した。
- ②「社会に開かれた教育課程」という理念を確立した。
- ③学力論を「内容」中心から「資質・能力」を基盤としたものへと拡張した。
- ④概念や知識相互の関連に言及し「知識の質」という考え方を提起した。
- ⑤教育方法のあり方を巡って「主体的・対話的で深い学び」という考え方を打ち出した。
- ⑥「各教科等の特質に応じた見方・考え方」という考え方を提起し、各教科等の目標に位置付けることで、各教科等の特質の明確化を推進した。
- ⑦「カリキュラム・マネジメント」の考え方を打ち出すと共に、教科等横断的な視点に立った教育課程編成を各学校に要請した。
- ⑧「単元（題材）」という考え方を復活させた。

その一方で、時間的な制約その他の事由により、以下のような事柄や問題を積み残したと考えられる。

- ①「社会に開かれた」の意味合いが、社会的効率主義に解釈されかねない。
- ②「知識の質」という考え方を、しっかりと伝えられていない。
- ③「見方・考え方」の書きぶりの足並みが、各教科等により不揃いである。
- ④「教科等横断的な資質・能力」育成の具体が十分には描けていない。
- ⑤「資質・能力」育成を打ち出しながら、「内容」の削減ができなかった。

最も深刻なのは、⑤のカリキュラム・オーバーロードであろう。これは世界各国に共通する大問題であり、しかもさらなる深刻化と慢性化が予測されている。したがって、何らかの対処が早急に求められる。

しかし、カリキュラム・オーバーロードは近年になって新たに生じた問題ではない。すでに 1939 年に Peddiwell が The Saber-Tooth Curriculum の中で論じているように、学力論とカリキュラム・ポリティクスを巡る原理的で構造的な問題である。特定のコンテンツが時代の変化等によって陳腐化し、あるいは無効化したにもかかわらず、それでもなおカリキュラムに残存する最大の理由は、形式陶冶的な学力育成に対する根拠の薄弱な希望的観測である。このメカニズムにより、時代の進展に伴ってコンテンツは増大し続ける運命にあり、カリキュラムは常にオーバーロードの危機にさらされ続ける。

これに対し、コンピテンシー・ベースのカリキュラムでは、概念的理解や構造的把握、あるいは汎用的なスキルの感得が達成されるならば、その個別具体的な現れである個々のコンテンツについては、そのすべてを網羅する必要はないと考える。コンピテンシー・ベースの下では、個々のコンテンツは、その習得や所有自体が持つ内在的な価値に加えて、何らかのコンピテンシー育成に対するイグザンプルとしての価値が、カリキュラムへの採否の判断基準となるのである。

とはいえ、実際には内容の削減は容易ではない。さらに、教材や内容を維持したままでの時数の大幅な縮減というテクニカルなアプローチの併用が望まれる。

具体的には、明示的な指導を原理とする学習内容の自覚化・道具化が有効である。さらに、その教科等ならではの方法論や鍵概念を踏まえることで、「見方・考え方」やそれに沿った系統的な理解が促進され、大幅な時数の圧縮が実現されることが知られている。

なお、時数の圧縮率は教科等の特質や時数規模により、かなりのばらつきがある。たとえば、国語科では小学校 6 年生で標準時数の 175 時数を 100 時数にまで圧縮できた事例がある一方、活動それ自体に一定の時間を不可避的に要し、またそもそもの時数規模が小さな図工科などでは、圧縮はほぼ不可能と考えるのが妥当であろう。

さらなるカリキュラム・オーバーロードへの備えとして、全体で少なくとも 20 %、できれば 30 %以上の時数圧縮を可能とする技術の開発と経験の蓄積が望まれる。



講演 「高大接続改革・大学入学者選抜改革と学習評価」

佐藤 真（関西学院大学）

1. 高大接続改革・大学入学者選抜改革における主体性評価

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」は、高大接続改革や大学入学者選抜改革を進める上で衆目を集めている。しかし、主体性を入学者選抜において評価することは困難であると指摘されている。けれども、新学習指導要領で示された資質・能力を育むためにも、主体性を評価することは必要であり、重要な事項である。これまでのペーパーテストなどのコンテンツだけでの評価ではなく、多面的な評価が必要となる。まずはセンター入試がなくなり、大学の入試改革が始まるが、そもそも大学教育を質的に改革することや、大学の在り方を問うことになる。

主体性をどう評価するのか。ICTを活用して、学びのデータを自分自身で入力し、蓄積していく e ポートフォリオという高大接続のポータルサイトがある。一過性のプロダクトではなく、高校での学びのプロセスを見るためのサイトだ。高校や大学の先生、社会人の皆さんが主体性をどのように見ているのかを研究し、

そこから導き出された因子を生徒が入力していくものだ。大学入試の選抜のためだけのポートフォリオにならないように注意する必要があるが、高校での教育の成果としての活用を期待している。

また、ただ主体性のみを評価することは避けたい。新学習指導要領の資質・能力を育成する3つの観点をきちんと評価するようにするべきである。今までは、「知識・技能」のみを評価してきているわけだが、これからは、レポートなどで「思考力・判断力・表現力」を、さらにeポートフォリオによって「主体性」を評価するようにしていくとよいだろう。

2. これからの学習評価における主体性評価

新学習指導要領が育成を目指す「資質・能力」を児童生徒に着実に育むためには、指導と評価の充実を図ることは重要である。これまでの学期末テストのように事後的な評価に終始するのではなく、これからの評価は、児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと、かつ教師の指導改善につながるものにしていくことが肝要である。

主体的で対話的で深い学び、すなわちアクティブラーニングに関しては、思考ツールだけではなく、比較・分類・関連付けなどのスキルを大切にしたい。思考の可視化、操作化、構造化であり、「考えるための技法」と言える。また、「見通しと振り返り」の活動を行うことによって、学んできたことに意義や意味があるということ、実感できるような評価を行う必要がある。さらに、評価とは一人一人の学習の成立を補うための評価でなくてはならない。

資質・能力の3つの観点でいえば、知識・技能は教科内容から、思考・判断・表現は、習得・活用・探究の学習過程から、学びに向かう態度は学び合う関係性からそれぞれ評価をしていく必要がある。特に、「主体的に学習に取り組む態度」について言えば、観点別評価を通じて見取ることが出来る部分と個人内評価を通じて見取る部分がある。「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、自己の感情及び行動を統制する能力や自らの思考の過程等を客観的に捉える力などの「メタ認知」を重視し、児童生徒が学習を行う過程において自分の学びを自己調整する機能を発揮していることを重視する必要がある。すなわち、「粘り強く」学びに取り組む意思的な側面と、「自己調整」を行いながらよりよく学ぼうとする意思的な側面との2つの側面によって評価をする。

3. まとめ

今後は、「評定」ではなく「評価」をすることが大切になる。評価とはコミュニケーションであることを重視するならば、ポートフォリオ評価が最適だ。児童生徒の学習作品を丁寧に見取ること、妥当性を見出すことが大切であり、さらに対話をしたり、エピソードを加えたカンファレンスを行ったりすることによって、児童生徒に対して明確に評価の意味付けをすることを重視するべきだろう。すなわち、ポートフォリオ評価を用いて、児童生徒と教師との共同的评价としたい。教師にとっての評価とは、評価の方法として捉えるのではなく、「真価を認めて、励ます」という教師の力量にかかっている。ポートフォリオ評価は、教師が児童生徒のプロセスをよく見ているからこそ、「振り返りつつ進む」という指導へとつながっていく。重要なのは、評価を生かして指導に返す形成的评价なのである。

(文責 東京 大野俊一)



<分科会A> 「授業づくり、単元づくり」

コーディネーター 橋本隆公（大阪成蹊大学）

第1日目…総合を中心に

「総合的な学習の時間」を中心とした3つの実践事例から授業づくり、単元づくりについて発表があった

1つ目の発表は、神戸市立長尾小学校の林愛子教諭から4年「Heart to Heart ～ともに生きる～」であった。第1次で障害について一人調べをした後、学級で話し合いを行う。子どもから「障害者だけでなく高齢者の中にも同じようなことで困っている人がいるよ」と次の課題が出てくる。教師から「校区にある高齢者福祉施設があるよ。調べてみようか。」と課題を設定する。介護施設に通う高齢者を「マイおじいちゃん」「マイおばあちゃん」と呼び、子どもとペアをつくる。ペアをつくることで、子ども達は主体的に自ら問いをもつことができた。子どもは高齢者となかよくなるために、自分に何ができると計画し、相手に喜んでもらえる交流会を続けていく。本単元を通して子どもたちは、高齢者や介護施設で働く人々と出会い、子どもなりに社会の仕組みや人々の生き方や生活を捉えることができた。

2つ目の発表は、神戸市立東灘小学校の奥井誠樹教諭から6年「生き生きと探究し、一人一人が学びを実感することをめざした授業づくり ～神戸港開港150年の学習を通して～」であった。生き生きと探究し、学びを実感する単元をめざして、本物との出会いを大切に活動を行った。グループテーマを「船」「港」「ひと」「まち」に絞り、神戸港周辺にフィールドワークを実施した。グループごとで調べたことを神戸港サミットで交流し合った。これまで調べたことをもとに、未来の神戸港や神戸のまちについて考えていく。その中で、大型客船との出会いや出港セレモニーの参加、ゲストチャーにきていただくなどの特別な体験を行った。自分たちが考えた未来の神戸港やまちの様子が実現可能かをテーマごとに報告し合った。これまでの学習成果を生かして、神戸がさらに魅力的なまちとして発展していくために、今の自分にできることを考えていった。この単元を通して、自分自身が成長したこと、友達が成長したことを確認することができた学習であった。

3つ目の発表は、神戸市立駒ヶ林中学校の藤本博嗣教諭から「防災シュミレーションゲームを用いた防災学習」であった。経済産業省が提唱する概念の社会人基礎力の養成を目指して教科との関連を図りながら探究活動を行った。災害に際しては、自助と共助の体制の構築と、これらと公助との兼ね合いをいかに進める



かが重要である。災害発生時には瞬時に判断し行動することが大切である。シュミレーションゲームは、その手立てをして有効な形式であると考えた。1年次では、生徒の判断力、協働力、知識の活用・習得を図るとともに主体的に活動できることをねらいとした。2年次では、防災を我が事として考え、相互に意見を交わすことをねらいとした。3年次では、臨場感をもちながら避難所運営という大人でも難しい課題をグループで考えながら、一人一人が自分の役割を見つけ、それを追究させることをねらいとした。（文責 大阪 西浦博久）



第2日目 … 教科を中心に

本大会のテーマ「個をみきわめたオーダーメイドの授業づくり」において、分科会 A「授業づくり、単元づくり」について、6つの実践発表を2日間に分けて発表された。その構成については、新学習指導要領のキーワードの1つである「教科等横断的な視点に立った教育課程」の編成にスポットをあて、1日目を「総合的な学習の時間」を中心とした3つの実践事例を、2日目は「教科横断的な学習」を中心とした3つの実践事例を、それぞれ授業づくりから単元づくりまでを網羅できるようにした。その際、「個をみきわめる」「オーダーメイド」を議論の機軸となるように試みた。そこで、2日目「教科を中心に」について報告する。

実践発表①は、算数科の問題解決学習に、総合的な学習の時間に身に付けた自己評価能力が越えてくるという設定である。この実践は、台形の面積の求め方を考える45分間の授業の中で、はじめ（見通しをもつ場）→中（学び合いの場）→終わり（ふり返りの場）において、一人一人の子どもが自己評価シート（つけたい力が数段階で明記されている表）を用いてつまずきを見つけ、シートに印を記入する。それを指導者が見ることでつまずきを共有した上で個別的な指導に取り組みやすくする自己評価の見える化をねらった授業実践報告であった。



実践発表②は、関連する教科の単元に、（日本では教科になっていないが）プログラミング教育で身に付けたプログラミング的思考が越えてくるという設定である。まず、①プログラミングの考えを学ぶ時間があり、そこで学んだプログラミング的思考を②各教科・領域などで活用する取り組みである。例えば、第1学年では、①での使用コンテンツ「とんぼの大冒険」を生活科「秋見つけたよ」で、第3学年では、「Codey」を学級会「おそうじ名人」で、第5学年では、「Codey Rocky」を理科「植物の発芽と成長」に活用する取り組みである。このように、6年間を通して、プログラミング思考を身に付け、各教科・領域に活用するカリキュラムの構築が特徴的である。

実践発表③は、新教科「未来そうぞう科」の未来そうぞうの資質・能力（主体的実践力・協働的実践力・創造的実践力）が、各教科・領域に越えてくるという設定である。その内容は、「自分自身を対象とする内容」「集団や人間関係を対象とする内容」「広く社会や自然を対象とする内容」で構成されている。そこで、第1学年の「広く社会や自然を対象とした内容」に関しての実践報告がなされた。きっかけは、前年度の1年生がやり残した「自分たちがお世話できる動物を飼う」ことの続きである。子ども一人一人の思いや願いは、もちろんのこと様々で、探究を繰り返しながら実現可能な動物を選択する取り組みであった。



以上の3つの実践発表は、「個をみきわめ」ることにより、「オーダーメイド」の学習内容や指導方法が創造されるという仕組みである。そのため、一人一人の学習状況の把握は重要であり、把握した上で個別に最適な教師の働きかけが不可欠である。このことは教師の力量だけにたよることができない。実践発表①では、自己評価シートの活用、実践発表②では、オーストラリアのSTEM教育の視点、実践発表③では、過去の探求の蓄積と継承が効果的にはたらいっている。これらの量的にも質的にも必要な情報を処理する

るために、Edtech・AI・ビックデータ・遠隔技術などの個別最適化の可能性を探ることもこれからの時代には必要かもしれない。（文責 大阪 橋本隆公）

<分科会B> 「カリキュラム・マネジメント、学校づくり」

コーディネーター 藤本勇二（武庫川女子大学）

カリキュラム・マネジメント、学校づくり

第1日目

学級経営とカリキュラム・マネジメントについて、「学びを深め合う学校づくり」、「学びの中核となる宿泊学習を創る」、「安心して学び合える学習集団づくり」の3つの実践発表があった。

丹波市立中央小学校の足立浩基氏の実践は、「学び合い」の場を授業の中に位置づけた学習形態を取り入れることによって、安心して学べる教室、児童が主体的に主体的に学ぶ姿が見られるようになった。

「主体的な学び」の姿勢をもてる教室を「誰もが学びに参加できる教室」であると考え、「たんば授業スタンダード」や「中央小学び合いの構造図」（中央小モデル）などを使って、より主体的に学べる学習過程を意識した学習活動を取り入れた。

児童一人ひとりを「みとる」ことに力を入れ、授業の中で、児童の様子や発言を丁寧に見たり聞いたりして、その思いや考えを理解し、それを指導に行かすことが、児童の視点に立った授業づくり、学級づくりにつながった。「みとり」から始まる授業研究によって、「よい授業」や「めざす教室の姿」の教員間の意識の差が少しずつ埋まり、確かな教材研究をもとにした授業計画の必要性や支援の在り方について学ぶよい機会になった。



妙高市立妙高小学校の館岡真一氏の実践は、当たり前前の景色、「何もない町」と言う子どもたちに、当たり前前の景色に”おもしろ”（上越の方言で「おもしろい」）ものを見付けられたら、日常生活が少しわくわくするだろうという発想から始まった実践であった。

おもしろ～ことを見付けるため埋蔵分科会センターの方のアドバイスを得た。アドバイスを元に、修学旅行をカリキュラムの中核に据え、他教科と関連させた総合学習を実施した。この実践を通して、他地域と較べながら「上越らしさ」を意味づけ、一人ひとりの違いを聴き合い、認め合う学級集団をめざした。

聖心女子学院初等科の森勇介氏の実践は、どの子にも、人と関わりながら学ぶ楽しさや喜び、学問の本質的な楽しさや喜びの種を蒔いてあげたい。そのためには、まず一人ひとりが安心して間違えられる、安心して「わからない」がいえる、つまり自分らしさが出せる集団作りが大切であり、それをマネジメントするのが教師の大きな役割であった。

4月の学級開きから一週間を学級経営の黄金の一週間と捉え、いろいろな仕掛けを紹介された。安心して間違えられる、安心して「わからない」が言える学級集団作りの第一歩として、たとえば初日の教室の黒板には不思議な文字があり、教師は一言もしゃべらない。また、10秒で魚を描こう、世界で一つだけのクラスの歌作りをするなどを紹介された。

「どうして」「なぜ」「違う数にしてみると」などの言葉がたくさん飛び交う授業が想像され、優等生が応えたら「いいです」と子どもたちが答える授業ではなく、「本当にそれでいいの」という疑問の眼を持つ子の溢れる学級、数学的な問いを個々が主体的に持ち、自分で粘り強く考えたり、友だちと学び合ったりする中で解決できたとき、一人ひとりが「ああ」深く学んだ」となる学級であった。

第2日目

授業でつくるカリキュラム・マネジメントでは、「総合的な学習を中心に据えた」カリキュラム・マネジメントについて3つの発表があった。

加古川市立川西小学校の藤池陽太郎氏の実践は、「恵幸川鍋」という地域教材を取り上げ、地域の食に携わる生産者の方々と連携・協働をしていく「社会に開かれた教育課程」を実現すれば、子どもたちが地域の食材の魅力や生産者の思いや願いを知ることができ、地域への愛着を深めながらよりよい社会を創る力を身に付けることができると考え、授業づくりを実践した。

課題と関連づけながら、国語や社会などの教科と関連させながら、探究学習を繰り返した。課題の解決において、整理、分析に重点を置きながら解決に向けて話し合いを重ねていくことで、子どもたちの問題意識は高まり、自分たちだけでは解決できないという子どもたちの必要感から、地域の食に携わる生産者と出合わせ、生産者の願いや思いを知ること、さらに問題意識を高め学びを深めていった。その繰り返しの中で子どもたちの地域への愛着は深まった。学習の最後には、地域の方々の協力を得ながら、地域の食の魅力がたくさん詰まった川西小5年生だけの恵幸川鍋を完成させ大きな成就感をもって学習を終えた



西宮市立北六甲小学校の箱根正斉氏の実践は、カリキュラム・マネジメントを通して単元全体や各教科の配列を検討し、関連させてデザインすることで深い学びの実現をめざした。教科を関連させて、総合を中心としたカリキュラムをデザインすることで、学んだ知識を相互につなぎ、課題解決に向けて知識・技能を活用・発揮させる場面を設定することによって、より汎用的な能力として獲得することができた。

めざす子どもの姿として、教科で学んだ力を活用・発揮させながら、子どもが普遍的な価値やより抽象的な概念を獲得する姿を思い描いて教師間で共有する。教師間の話し合いは繰り返し行われ軌道修正しながら指導に当たった。さらに、保護者・地域とカリキュラムを共有されることによって社会や地域全体に学びのフィールドが広がり、よりよい社会に生きる力を育む実践と言えた。



奈良女子大学教育システム研究開発センターの堀本美和子氏の実践は、奈良女の学習法について発表された。「生活即学習、学習即生活」という生活のなかから学びをたちあげ、学びを生活に生かすという考え方、しごと、けいこ、なかよしという教育構造、独自学習→相互学習→さらなる独自学習という学習過程について話された。

学びの自覚化、子どもが生活や学習をつくるということについて話され、独自学習・相互学習・さらなる独自学習を経て、今後の生活をどう創るのか、自分に問い続ける学習で

あった。

特に、しごと学習は、生活を源とする問いから発する子どもの追求が、教科、領域の垣根を越えた総合的な生活発展学習となり、どこまでも真実を追究する実践であった。その実践例として、「くらしの中の木を探ろう」（4年）林業体験をきっかけに「割り箸」の学習に展開した実践と「暮らしの中の税金を考えよう」（6年）消費税が上がる前後の世の中の変化に着目し、税の種類や歴史、税の使い方などを調べ自分たちのくらしが税金によって支えられていることに気づく実践が紹介された。（文責 埼玉 多田信夫）

シンポジウム「個をみきわめたオーダーメイドの授業づくり」

奈須先生の司会のもと、登壇者からの報告を踏まえて、指定討論者の加藤会長、成田先生を交えた討論が行われた。

①藤本先生：子どもが主体的に行う「教育実習（下級生の教室で指導案をもとに理科の授業をする）」、幼稚園に出張授業に行った実例等において、子どもの学びから、普



段の授業では見えないそれぞれの個というものが発現された。このような実践からは、教師は子どもたちから個を引き出すことが可能であると同時に、教員が子どもたちによって、それぞれの個に気づかされる機会があるといえる。

- ②橋本先生:分科会BⅡでの3つの実践報告について、1. 子どもの個々のつまずきのタイミングや内容が見える化・共有化・個別化することで個人(オーダーメイド)指導ができる。2. プログラミング的思考を養うことは遠隔技術により実現が可能であり、授業外・学校外で利用できる環境は深い学びに繋がる。3. 新教科には既存教科にない本質が存在し、実践した本質を各教科に戻すことが重要である。また、新教科は出ては消える一過性の新教科であってはならない。
- ③佐野先生:一見教育的に不適切であるが、自由進度学習では一人学びに集中する自然な実際の子どもの姿がある。子どもの個々の学びのスタイルに応じて、動画や掲示物を各部屋に設置する等の学習環境が重要である。自分のペースで学習が進むと学習効率が上がり、発展学習に取り組む機会もできる。自ら進めた学習として国語科の授業で工作となったり、社会科の中で小説を書いた事例がある。これらも発展学習と捉えてもよいのではないかな。
- ④澤田先生:分科会での実践例からも、固有名詞レベルで良さを拾い振り返る評価や個人内評価を重視すること、サポートが必要な子についても自己学習の過程を見守ることで初めてカリマネとなることがわかる。また、例えばJアラート訓練を行う場合、どのような子どもを育てたいのかという問いについて社会に開かれた教育課程と資質能力論とのずれが生じている場合がある。子どもの真のwell-beingを目指すには、コンピテンシー論については、インクルージョン、デモクラシーを含めて、その上で公平で平等な社会を構築していくという考え方を大事にしたい。そうした多面的多角的社会のwell-beingを目指した緒川小学校のように、学校全体をデザインしなおすという視点こそ、カリマネの原点である。

成田先生:これまで個性化学会が力を入れてきた個をみきわめる=子ども理解=評価という考え方において、一人学び、教科横断等の手法から今一度再考が必要である。今の時代を生きる子どもたちが複数の解から、葛藤を経て自分で価値の序列の原理に基づき、選択・決断し、最善解を得る力を目指すべく、自由と選択の機会を学びの中に創り出す新たな活動の工夫が求められる。これまで、本学会では学習形態論、方法の実践研究に重点を置いてきた。子どもの課題追及に対する持続的な傾向性を捉えずに個に応じることは難しい。自学能力の根拠をもち、予想できる個人差を想定し、適性に応じ多様化したパッケージ開発をするために、それぞれの子どもが学ぶ姿から個を引き出し、見極めることが極めて重要である。How to にばかり関心が集まり、指導要領を確実にこなすことのみを考えればカリキュラムオーバーロードの原因にもなり、個の見極めに近づいていけない。



加藤先生:教科横断的から教科そのものの在り方も、基本的な教科の本質を精選する方向へ、すなわち教科にまた戻りつつある。日本はこれまで教科の内容を文科省が決め、先生は教え方を工夫することが暗黙の了解であった。方法の中に自由進度、一人学びがあることから、内容と方法をドッキングする必要性がある。個性化学会の先生方は方法の中で一人学びを工夫して教科の本質をつかむことを目指してきた。内容を取り込みやすいのは総合学習であり、今回の改定については、困難でもあるが、内容も含んで取り組める可能性が出てきた。イノベーターという観点なら、教科横断的という言葉において、方法を超えて実践していく時期にきているかもしれない。方法論については、私たちは相当行ってきたことから、今後は内容も組み込んだチャレンジということになる。



奈須先生:基礎—発展という流れについて、教えた内容の枠を乗り越えたとき「これまでの範囲ではできない」ではどうするか、という問いを生み出す力、そこで個性的に創造的に適用することに価値を置き、新たに面白いものを創造していくことも発展とも言えるのではないかな。

上述のコメントを受け、登壇者からは、自由進度学習の実践例には教科書のように順に発展するものもあれば、発展といえる具体的な内容に取り組む過程で、子どもが基礎や本質に出会う学びも実際に実現していること、教科の本質とは解釈が難しいが、子どもは学ぶ意味・意義が感じられたら学ぶことから、問題のある子どもにも焦点をあて対話することの重要性および授業以外の様子の肯定的なフィードバックの必要性も指摘された。

また、学習指導要領と実践の関わりにおいて教科書はティーチャープルーフであり、どんな先生でも指導内容は均一化されること、総合では教科書がない点で、内容に踏みこむことの重要性が指摘された。教科書を全てこなすことに集中する必要はない。どのような子どもに、ひいては社会にしたいかを考えて教育は行われるべきだという原点にも言及された。

個性化教育を推進してきた先生方の様々な視点から、また学習指導要領に関わっている先生からのコメントも含め、現場の先生方への呼びかけもあり、多方面からの検討が叶った討論となった。個の捉え方、子どもたちの探求の過程にある教科の学びの実現について、本学会が目指す今後の方向性が示唆されたシンポジウムであった。

(文責 東京 伊藤 静香)



2018年度 日本個性化教育学会 会計報告

2019年8月10日

【収入の部】

(2019年3月31日締め)

項 目	予 算	決 算	備 考
個人会費	600,000	612,000	4000円×153
団体会費	21,000	14,000	7000円×2
繰越金	104,268	104,268	前年度繰越金
預金利息	0	0	銀行利息
免許更新・研究会	100,000	186,400	全国大会・春季研参加費
論文投稿料等	25,000	40,000	学会誌論文投稿料
その他	50,000	60,700	春季研書籍販売収益
合 計	800,268	1,017,368	

【支出の部】

項 目	予 算	決 算	備 考
事業費	100,000	100,000	全国大会運営補助費
春季研究会運営費	30,000	25,939	7月研修会・春季研会場費等
学会誌刊行費	400,000	462,216	会誌編集印刷・編集通信費等
広報活動費	200,000	149,565	会報発送・HP運営
事務費	30,000	22,506	連絡通信等
消耗品費	20,000	15,112	印刷・文具等
諸費	20,268	0	弔電・手数料等
合 計	800,268	775,338	

〇差し引き残高 1,017,368 - 775,338 = 242,030

上記の通り決算報告いたします

会 長 加 藤 幸 次
事務局長 奈 須 正 裕
会計部長 五十子 晴 美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査 中澤米子 多田信夫 (印省略・・・会計監査承認ハガキを受理しています)

2019年度 日本個性化教育学会 会計予算案

2019年8月10日

【収入の部】

(2019年3月31日時点)

項 目	内 訳	予 算
個人会費	4000円×150	600,000
団体会費	7000円×2	14,000
前年度繰越金		242,030
会誌論文投稿料		30,000
その他	免許更新・研究会	150,000
合 計		1,036,030

【支出の部】

項 目	内 訳	予 算
事業費	夏の大会の運営 会場費・発表者交通費等	100,000
春季研究会運営費	学会誌編集印刷・編集通信費等	100,000
学会誌刊行費	会報発送・ホームページ運営	500,000
広報活動費		200,000
事務費	連絡通信等	40,000
消耗品費	印刷・文具等	30,000
諸費	弔電・手数料等	66,030
合 計		1,036,030

会 長 加 藤 幸 次
事務局長 奈 須 正 裕
会計部長 五十子 晴 美

第13回 日本個性化教育学会全国大会

開催地：東京都 会場：上智大学

開催日：2020年秋 期日は未定です。決定次第お知らせいたします。

2020年の夏には、東京オリンピック・パラリンピックが開催されるため、宿泊場所、会場までの交通手段、会場の確保など、例年とは異なる状況が予想されます。そのため、オリンピック・パラリンピック終了後に開催いたします。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

庶務部長 佐久間 茂和

〒362-0064 埼玉県上尾市小敷谷 77-1

西上尾第二団地 3-28-502 TEL 048-717-0801

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会

第34号

2019年9月7日発行

編集責任者
編集

事務局長
広報部

奈須 正裕
多田 信夫